
赤いトンボが雪空を飛ぶ

戦場の見習い天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤いトンボが雪空を飛ぶ

【Zコード】

Z6925Z

【作者名】

戦場の見習い天使

【あらすじ】

現代に残る大日本帝國。

世界最強の海軍を持ち、数々の戦いを勝ちあがつてきた国。そんな大日本帝國がハルケギニアに転移してしまったら？

という仮想のお話のある一人のエースパイロットと『雪風』の異名を持つ少女を中心に描くお話。（だといいね本当に。）

基本的に気が向いた時にしか更新しません。

赤いトンボが雪空を飛ぶ プロローグ

大日本帝國海軍 第三艦隊旗艦 航空母艦紅龍

「艦長。敵航空隊は全滅しました。こちらの被害一部の機が被弾しただけです。

敵飛行場への攻撃も成功しています。」

「そうか。よくやつてくれたよ。これで朝鮮の空軍は軒並み壊滅。我々の勝利は近いな。」

「はあ・・・艦長・・・そういえば今日は・・・」

「クリスマス。か? そうだな・・・今日ぐらには戦争やめにして祝わせてくれないかねえ。敵さんも祝いたいだろ?」

「艦長つて親バカですか? 外、雪降っていますよ。」

「親バカで悪かつたな・・・今日の飯は豪勢だよ。早く行こうじゃないか。」

「艦長。メリークリスマス。」

「メリークリスマス。」

誰かとこんなたわいない話をする。

戦争の中でも、こんな平和な日常だった。

俺の、まだ仲間がいて、親友がいて、まだ幸せだった時の記憶。

一年後。

この世界には航空母艦紅龍も、あの気さくな艦長も、たくさんの仲間も。

みんなこの世にいなかつた。

朝鮮地方、中国は日本に降伏した。

だが、その日、ロシアとアメリカからミサイルが発射された。全ての防衛、撃墜に成功するが、その日にロシアとアメリカは宣戦布告。

それから一年後。

激しい戦いを潜り抜けて、沢山いたはずの仲間は、守りたかつた仲間は、

この世からいなかつた。

日本は戦争には勝つた。

多大な賠償金、敵国のほとんどの軍備の禁止。そんな講和条約でさえ通つてしまつまでに敵国は打ちのめされた。

第三次世界大戦。

アメリカ、ロシアを筆頭とする連合軍は日本、ヨーロッパ勢、満州国などを筆頭とする枢軸軍に宣戦布告。大量の核爆弾が発射された。だが枢軸軍はそのほとんどを防御。

その後の作戦も、ワシントン・D・Cに発射された水爆や無差別爆撃によりアメリカに鬪う力は残つていなかつた。ロシアもまた同じ結果となつた。

だがあまりにも最初に発射されたミサイルが多かつたために核を運ぶための大型ミサイルを優先的に撃墜していつた結果、小型ミサイルの撃墜が追いつかず、軍基地に突入する形となつた。

その結果、大日本帝國は沢山の兵力を失う形となつた。

あのクリスマスの夜。

俺は目の前で、仲間がミサイルに直撃して木端微塵になるところを見た。

目の前で俺を尊敬していた仲間が撃墜されるのを見た。

俺の中の何かが壊れる音がした。俺には耐えられなかつた。

俺が空母艦載機のパイロットから転属願いを出したのは、その年の内だつたと思う。

そうして、撃墜機24機のエースパイロットは陸戦隊に異動となつた。

あれから、何年が経つのだろうか。

一日一日が長く感じられる。

もしも俺があいつらに会えるのなら、最初に何を言つのだろうか。

その言葉が見つかるまでは。

俺の心が癒えるまでは。

また心から守りたい物が見つかるまでは。

俺はあのJ-20の操縦桿を握れそうに無い。

俺は近頃おかしな夢を見た。

知らない地で、道に迷い、どこかの『ロシキビ』にも絡まれ、それをぶつた切つていく。

その国は日本じゃあなかつた。

魔法があつて、バカみたいな身分制度。

普通ならすぐ忘れるはずの夢なのに、何故かその夢だけは頭からこびり付いて離れなかつた。

起きて艦隊で定められている訓練をする。

走りこみ、腕立て伏せ、腹筋、背筋、射撃訓練。

へばる奴らがいる中、俺はその重いメニューを難なくこなす。

俺はやっぱり、あの夢の事を考えていた。

大日本帝國が太陽系第三惑星地球から消滅したのは、その一ヵ月後
の事だった。

赤いトンボが雪空を飛ぶ プロローグ（後書き）

まだボカやっちゃった。

いつも連載している一作品に行き詰つたら書くみたいな話にしたいです。

赤いトンボが雪空を飛ぶ 設定資料

原発事故について

電力会社上層部、官僚、政治家の腐敗を国と国民と天皇陛下が許さなかつた。

なので有事への対策もしつかりされた。

結果、事故は発生したものの、史実の東海村JCO臨界事故の事故程度の被害で済んだ。

その後反原発運動が繰り広げられることになるが、原子力に頼りきりな電力事情や転移でどうやむやに。

東日本大震災について

史実通り。

地震発生の知らせを受けた軍はすぐさま東北に展開。後に述べる海上護衛隊、海軍による救助も行われた。なので若干死者が少ない。

国としての課題は、転移の対策の他に、東北の復興もあるので困るところ。

政治が史実の日本よりしつかりしているので、復興は史実よりは早いと考えられる。

軍について

帝國海軍は戦艦4、空母8、巡洋艦24、駆逐艦60、強襲揚陸艦24、潜水艦60を保有。
(掃海艇やら病院船とかは別)

何故戦艦が残っているかというと、艦体が大きいのでVLSとか沢山積めたり、イージス艦の強化版みたいな使い方をする。後男の口マン。

また、数年前から勃発していた戦争により海軍の主力艦が増えたり、平時の今では戦力が多すぎたりする。艦隊は全部で6艦隊ある。艦上機はJ-20。

高望みな新技术はやめて、F-18にステルス性能を付加して、航続距離を伸ばした。武装もだいたいF-18と同じだつたりする。艦上ヘリは大体シーウークみたいなやつだつたりする。

電子戦用に日本版EA-6みたいな物も搭載している。

空軍については、J-20やA-10がいる。

陸軍は省く（何）まあ陸自とアメリカ陸軍を足して2で割ったような感じ？

あと日本国籍の艦船の護衛、日本周辺のパトロール、遭難者救助のために海上護衛隊が存在する。護衛艦は海保と何か似ている。速度なんかは違うけど。（拿捕を容易に行つため高速化している）

優れた兵器であれば日本人にあわせた魔改造をされ量産。

史実がいろいろとおかしくなっている為日本がステルス機を開発してしまつたりとか、中国の核保有が認められていないなどいろいろなご都合設定がある。

マスコミ

政府の抜き打ち検査だつたりいろいろあつたりする。だつて機密情報垂れ流しにされたらアレなので。

左翼、共産主義者、在日は？
治安維持法の規則軟化版がある。
あと特高で取り締まつたりする。
そのためそういう人間にとつては住みにくいかも。
日本国籍はそう簡単には取れない。当たり前だ。

満州国について。

史実どおり建国。

対アメリカ戦後のソ連戦に参戦している。

基本的に建国時と領土はほぼ同じ。

親日国の一いつで、農業や鉱業などが盛んである。

最近では日本の高い技術力を持った企業の移転が進んでいる。

移転後の日本にとつては食糧の輸出などで以前より親密な関係になる。

人口は大体4億程度。

軍などは陸軍と空軍のみで、日本軍と装備がほぼ同一。（または劣化版）

海軍に関しては本編参照。

本当の話厄介な所として朝鮮半島を入れよつと思つたが、問題解決してもあそこには存在自体（以下検閲により削除されました）

赤いトンボが雪空を飛ぶ 設定資料（後書き）

中途半端なところに入れてみる。

他にも何かございましたらお願ひします。

12・25 色々と修正。

12・31 何かもう色々とボロボロ。また修正。

近頃にこれをもう少し詳しくしたものをつけたい。

赤いトンボが雷空を飛ぶ 帝国海軍艦艇集

大和級戦艦	基準排水量 67,000トン 全長 280m 全幅 39m 速力 30ノット
兵装	50口径46cm3連装砲 × 3 60口径15cm3連装速射砲 × 2 64連装誘導弾発射装置 × 2 (64セル、2基のVLS) 四連装巡航ミサイル発射装置 × 2 (ハープーン、トマホーク)
赤城級原子力航空母艦	20mm近接防御火器装置 (CIWS) × 4 同系艦 大和、武藏、信濃、紀伊 計4艦
兵装	基準排水量 122,000トン 全長 370m 飛行甲板最大全幅 85m 全幅 45m 速力 31ノット 搭載機 120機
赤城級原子力航空母艦	第二次世界大戦で製造された戦艦。世界最後の現役戦艦であった。何回かの近代化大改修を行い、何とか現役で活躍中。 老朽化が進んでいるため、退役が決定していたが転移で撤回。 モデルは大和級の近代化版。
兵装	25連装近接防空誘導弾発射装置 × 2 8連装対空誘導弾発射機 × 2 20mm近接防御火器装置 (CIWS) × 4 同系艦 赤城、加賀、蒼龍、飛龍、紅龍、翔鶴、瑞鶴、大鳳、鳳翔 計9艦 (ただし紅龍は戦没)

元々1990年代に従来の空母の更新用として翔鶴まで製造された。

(前期型)

だが紅龍の沈没などで新造や欧米への増援のための戦力の増加が必要となつたため、

さらに3艦を製造。(後期型)

戦争終了後他国に一部を譲渡する計画もあつたが転移でうやむやに。モデルは仮想戦記に出でてくる空母やうじろいろと。

愛宕級巡洋艦(新愛宕級)

基準排水量11000トン 全長190m 最大幅18m 速力

33ノット

搭載機3機

兵装

60口径127mm汎用速射砲2基

64連装誘導弾発射装置×2(64セル、2基のVLS)

四連装巡航誘導弾発射装置×2(ハープーン、トマホーク)

20mm近接防御火器装置(CIWS)×4

三連装短魚雷発射管改×2

同系艦 古鷹、加古、青葉、衣笠、妙高、那智、足柄、羽黒、高雄、

愛宕、摩耶、鳥海、最上、三隈、鈴谷、熊野 計16艦

利根級の老朽取替として投入。速度の向上や防空性能の強化が図られている。

モデルはタイコンデロガ級の拡大版。

利根級巡洋艦(愛宕級巡洋艦)

基準排水量10000トン 全長173m 最大幅17m 速力

30ノット

搭載機1機

兵装

60口径127mm汎用速射砲2基
四連装汎用ミサイル発射装置×5（ハープーン、トマホーク等）

20mm近接防御火器装置（CIWS）×2
三連装短魚雷発射管改×2

同系艦 利根、筑摩、金剛、比叡、榛名、霧島、扶桑、山城 計8艦
航空機戦術や技術などは日進月歩の勢いで進歩しており、艦隊の防空を図るために開発された。だがより高性能な新型巡洋艦への更新が進んでいる。

モデルはバージニア級。

天龍級強襲揚陸艦

基準排水量 32,000トン 全長 205m 全幅 38m 速
力 33ノット

搭載戦力 主力戦車10両 歩兵戦闘車20両 自走砲10両 非
装甲車90両 陸戦隊1300名

搭載機数 30機

兵装

25連装近接防空誘導弾発射装置×2

8連装対空誘導弾発射機×2

20mm近接防御火器装置（CIWS）×2

同系艦 天龍、龍田、球磨、多摩、北上、大井、木曾、長良、五十
鈴、名取、由良、鬼怒、阿武隈、川内、神通、那珂、夕張、阿賀野、
能代、矢矧、酒匂、平戸、大淀、仁淀 計24艦

従来の揚陸艦より速力が高く、輸送量も多い。だが航空機の搭載量では劣る。

モデルはワスプ級。

夕雲級駆逐艦

基準排水量4,500トン 全長153m 全幅16m 速力31ノット

搭載機1機

兵装

60口径127mm汎用速射砲×2

高性能20mm機関砲（CIWS）×2

単装対空誘導弾発射機×1

4連装巡航誘導弾発射機×2

8連装対潜誘導弾発射機×1

3連装短魚雷発射管×2

同系艦 夕雲、巻雲、風雲、長波、巻波、高波、大波、清波、玉波、涼波、藤波、早波、浜波、沖波、岸波、朝霜、早霜、清霜 計18艦
利根級と同時期に開発された汎用駆逐艦。装備の陳腐化が進んでいるが、船体が小型なため更新する余裕が無いため、今後取替が進むと思われる。

はつゆき型がモデル。

秋月級駆逐艦

基準排水量5,200トン 全長158m 全幅16.6m 速力

32ノット

搭載機1機

兵装

60口径127mm汎用速射砲×1

高性能20mm機関砲（CIWS）×2

4連装対空誘導弾発射機×2

4連装巡航誘導弾発射機×2

8連装対潜誘導弾発射機×1

3連装短魚雷発射管×2

同系艦 秋月、照月、涼月、初月、新月、若月、霜月、冬月、春月、

宵月、夏月、花月 計12艦

こちらは艦隊の防空を主任務としている。装備が一部変更されており、若干速度が増加している。
はつゆき級の拡大防空版。

陽炎級駆逐艦

基準排水量70000トン 全長161m 全幅18.7m 速力3
3ノット

搭載機3機

兵装

60口径127mm汎用速射砲 × 2
高性能20mm機関砲（CIWS） × 2
64連装誘導弾発射装置 × 1（64セル、後方）
32連装誘導弾発射装置 × 1（32セル、前方）
四連装巡航誘導弾発射機 × 2
8連装対潜誘導弾発射機 × 1
3連装短魚雷発射管 × 2

同系艦
陽炎、不知火、黒潮、親潮、早潮、夏潮、初風、雪風、天
津風、時津風、浦風、磯風、浜風、谷風、野分、嵐、萩風、舞風、
島風、妙風、清風、村風、里風、山霧、海霧、谷霧、川霧、山雨、
秋雨、夏雨 計30艦

防空性能の向上や吹雪級や夕雲級の置き換えのために導入された。
艦隊防空のために新愛宕級で開発した最新技術を流用している。
速度、防空性能などは他の駆逐艦を圧倒しているが、駆逐艦にして
は値段が結構高いため駆逐艦全ての置き換えには至らなかつた。
モデルはこんじつ型。

赤いトンボが雪空を飛ぶ 帝国海軍艦艇集（後書き）

何かいまいち。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？

2012年3月12日5時31分。

大日本帝國は突如地球上から消滅した。
同時に満州国、帝国の植民地として統治していた南洋諸島も消滅。
いつの間にか海になっていた。

外洋に出ていた大日本帝國国籍、満州国国籍の船舶、艦隊も消滅。
日本や満州国に寄港していた外国の船舶まで巻き込まれ姿を消した。

始まりは地球のほぼ全域で観測された震度3程度の地震だった。
特に大した被害などは無かつた。

だが、その時から満州国、南洋諸島、国内以外の通信回線が不通となつた。

外洋に出ていたはずの船舶がいつの間にか日本本土に戻っている。
ちなみにパソコンなどのサーバは有事にインターネットなどへのサ
イバー攻撃時の際に国の事業で定期的に上書き保存されるデータを
使用したのでそのままの状態だった。

そのため一部の人々は異常に気付いた。

インターネットの動画投稿サイトなどで海外からの更新や通信が突
然止んでしまったのだ。

そして海外にかけたはずの電話もからなくなつたのだ。
異常事態として政府に報告され、政府の調査が始まったのだ。

そして海外（満州国以外）との連絡が完全に取れないというや、G
PS衛星の通信の不通が判明し、日本政府が声明を出したのはそれ
から5時間後。

「満州国、日本本土、南洋諸島以外の連絡が取れない状態になつて
いる。

GPSも使用できなくなつていて、これには何らかの理由があると

思われる。

大日本帝國軍は今後起きる可能性のある暴動の阻止や他地方との連絡に努めよ

帝國臣民、満州国民の皆様は普段どおりの生活を冷静かつ出来る範囲で行つよ」

日本人たちの行動はいたつて冷静だつた。

学校ではいつものように授業が行われ、一部の会社ののぞく会社では不通のように業務が行われた。

政府は近辺の状態確認のために大日本帝國海軍第三艦隊、第四艦隊、第五艦隊、第六艦隊が出港。

資源の備蓄状態や満州国や南洋諸島で取れる資源の確認などが行われ、元々2012年3月に打ち上げられる予定だつたGPS衛星の完成を早めて出来るだけ早く打ち上げることに決定した。

外国人たちは暴動を起こそうとしたが、特高に取り押さえられた。結果、ほとんど何事も無かつたような生活になつた。

だが首相官邸では、日本や満州国を取り巻く厳しい現実が明らかとなつた。

資源の備蓄は昔からやつていて、原油、石炭、天然ガスの備蓄は国内消費量の一年分。その他資源で特に重要な鉄やゴムなどは半年、その他の資源も三ヶ月分はあつた。

だが食料はどうしようもなかつた。昔より自給率は上がつていて、さらに原子力発電の増強や自然エネルギー発電の増加で電力は増えたといえ余裕が無い。

資源だつて逆を言えばそれくらいしかないとことになる。つまり、大日本帝國の滅亡までのタイムリミットは、長く見積もつて二ヶ月ということになる。

そして、現在大日本帝國や満州国がある位置についてもとんでもないことが発覚した。

「異世界に転移！何故そのようなことが起こるのかね？」

そう聞くのは内閣総理大臣の加地貫太郎である。

専門家が言つには、地球上の大気とはCO₂や排気ガスの量が違うこと、日本の位置の磁場などの乱れなどから、大日本帝國は異世界に転移してしまつたのではといつ予測が立てられた。

そして、その決め手となつたのは海上護衛隊からの通信だった。

「海上護衛隊から入電です。『我、コレマデ陸ガ存在シナカツタ位置ニ謎ノ大陸ヲ発見セリ』」

次の日、大日本帝國、満州国は、次の事を発表した。

- ・大日本帝國本土、大日本帝國沖縄台湾地方、大日本帝國南洋諸島、満州国は地球ではない別の場所に転移した可能性が高い。
- ・海上護衛隊は謎の大陸を発見した。
- ・資源、食糧の備蓄が少ないこと。
- ・謎の大陸については、その方角に向かつていた大日本帝國第三艦隊の艦載機を使用して偵察を行う。戦闘はできるだけ控え、危険がないようなら陸戦隊の上陸を行つて調査する。
- ・満州国は国境で海に面しているところが出てきたため、解体待ちの駆逐艦などを使用して急遽海軍を創設する。

さすがに日本は大混乱になつた。政府からの声明にマスクミモジをつて取り上げた。

だが、これは大日本帝國、満州国、そしてハルゲギニアを揺るがすとんでもない出来事の全ての始まりに過ぎなかつたのだ。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?（後書き）

いわゆる導入編といつとこりです。

主人公が出てくるのはもう少し先になりそうです。

追記　読者様からのご感想の中に「朝鮮半島いらないだろ」というご感想があつたのですが、完全な誤字です。
申し訳ございません。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？

「司令。では訓示をお願いします。」

声をかけられる黒い髪をした長身の男。

彼の名は石嶺　日向。若くして第三艦隊司令長官となつた海軍少将である。

「全く・・・面倒くさいなあ・・・」

そう言つて壇上に進み出る。

でも、彼の目は決して面倒くさそうな目ではなかつた。

「君たちに問う。君たちはこの国が好きか？」

そう問うと、はいと言つ大きな返答。

「どうか。今、大日本帝國は存亡の危機に瀕しているのは君たちもご存知の通りだ。

ここで我々がやらねば、皇國は飢え死にする。

君らの大切な人も、俺の大切な人もだ。

俺たちがやらないとこの国は救えない。

君らがこの国を救うのだ。

例え何があるうとも、責任を持ち、帝國海軍の誇りを持つて、礼儀正しく、そして、世界最強の船乗りの力を世界に示せ！

長い話は嫌いだ！以上にする！

普段どんでもない急け者そして面倒くさがりやで有名な石嶺だったが、この日は違つた。

まるで覚悟を決めたような、肝の据わった目。

そしてそれに共鳴して、第三艦隊の士気は最高潮に上昇する。

でもそれが終わつたとたんに面倒くさい面倒くさいと言つていたのは司令部だけの話。

数日後、第三艦隊は謎の大陸から大体75kmの所に来ていた。

航空母艦飛龍の会議室では、今後の会議が行われていた。

「司令。我艦隊の任務は大陸の視察であります。ここで停泊して、偵察機を出すことを進言します。」

海軍に入つてから数十年がたつであろう白髪の男。第三艦隊参謀長、沢井が提案する。

「まあここいらでいいだろ。偵察機を発艦させよ。」

第三艦隊の旗艦、赤城級空母飛龍から偵察隊が発艦する。

赤城級空母は皇紀2652年から製造された世界最大の原子力空母。艦上機を120機も搭載することが出来、122.000トンの排水量を持つ。

飛龍の他に赤城、加賀、蒼龍、翔鶴、瑞鶴、大鳳、鳳翔と8艦が存在する。

ちなみに紅龍が同系艦として存在していたが2010年の第三次世界大戦時の開戦後すぐのミサイル攻撃により沈没している。

偵察機は編隊を組むと、西の方角へ動き出した。

「機長。暇ですね・・・」

偵察機の乗員。

「そんなこと言つちやあかんよ。俺たちの偵察結果次第でつまづけば皇国が救われるのだろ?」

別の乗員が声を上げる。

「前方方に陸地が視認できますー。」

そこには黒い砂をした砂浜が見えてくる。
奥には森がある。

ヘリは方向転換して陸地へと向かう。

「リリが・・・」

少しずつ近づいてくる陸地。

だが、彼らはとんでもないものを田の畠たりにした。

「見てくださいー下に・・・豚でしょうか?いや豚にしては少し大きいですね。」

「こちら飛龍偵察機隊、謎の大陸に正体不明の生物を確認。調査を続行する。」

偵察機隊は生物の画像を撮影して別の箇所を調査する。

しばらく飛んだところだらうか。

「三時方向に村でしょうか?建物が見えます。」

「つむ。だが良く見てみろ・・・」

「残骸ですね。何かに流されたのでしょうか・・・」

「もう少し低く飛んで人がいないか調べるぞ。」

「低空飛行に移る。人の姿は全く確認できない。」

「仕方ないな・・・元の高度に戻り方向を転換するぞ。」

方向を転換して、飛行する。

数時間後、町が見えてくる。

「前方に町を確認！この大陸には・・・」

「文明があり、人が生活しているか。」

「町を調査するぞ。」

高度を下げる。町の中にいる人は驚いて上を見ている。

服装は中世のヨーロッパに似ている。文明もそのくらいだ。杖を持っている人もいる。

だが、事件は突然起こった。

「機長！ 前方に火の玉が一つ飛んできます！」

突然火の玉が飛んできたのだ。

「回避するぞ！ 全くーーここはどーのファンタジー世界だよー！」

何とか回避に成功する。だが次から次へと火の玉が放たれていく。

慌てる偵察隊。

「高空へ上がるぞー！」

「こちら飛龍偵察機隊。人間の町を発見。文明はヨーロッパ中期レベルかと思われる。町にて攻撃を受けり。火の玉が飛来したが回避し、被害なし。報復射撃の許可を求む。」

ヘリが動きながら母艦に連絡する。しばらくして返答が帰ってくる。

「こちら飛龍。報復射撃は許可できない。直ちに母艦に帰投せよ。」

通信員からそのように言われる。残念そうな顔をして機長が言つ。

「そうか・・・こちら1番機。全機反転。母艦に帰投する。」

だが試練はそれだけではなかつた。

「こちら4番機！後方より飛行物体飛来！」

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?（後書き）

何か俺つて気が向いたときと気が向いていないときの執筆スピードが違うすぎるような気がする。

別に書いている小説の更新をするので更新はまた今度になりそうです。と思つたけどすぐ書いてしまつている件について

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?

空母飛龍の艦内のどこかには、ピアノが置いてある部屋がある。少しの人物しか知らない、秘密の部屋。

ピアノの他には数個の椅子とテレビとローラレコーダー位しか置いてないその部屋のピアノからは、こつもある曲が流れる。

悲しくて、綺麗な曲。

彼は、人が来ているのに気付かず、その曲を弾き続けていた。やがてその曲が終わり、彼がこちらに気付く。

長い金髪に綺麗な顔立ち。だがその目はなんだか悲しげで。

彼、谷澤勇樹がこちらに気付き、敬礼をする。石嶺は答礼をすると、話し始める。

「谷澤。またここに居たのか。」

「悪いですか?」

「まあ別に悪いは無いが・・・このままじゃ あこの海軍の七不思議になるぞ?」

「どうこう?」

「航空母艦飛龍にいつも同じ曲をピアノで演奏している七靈が居るつて。」

「七靈・・・ですか。まあこんな秘密基地みたいなところから流れできりやあ誰もわかりませんよね。」

仕方が無いだろ?と言つた顔で彼は笑う。

「またその曲か・・・それに何時までもあの事を考えていたら・・・」

「

「『前に進めない』ですか?その言葉は耳にたこができる位聞きましたよ。司令。それに・・・」

「『いつかは直る』だろ?その何時かは何時なんだよ・・・若葉のやつはもう直りやがったのにさ。」

「あのは能天氣すぎます。それに司令はあの人甘いですよ。力ツブルじやあるまいし。死亡フラグが立ちますよ。」

「まあ・・・家族だからな。」

「さてと・・・何の用ですか?」

「特に何も。曲を聴きに来ただけだ。」

「そんな人に聞いて貰えるほどつまらは無い」と思っています。」

そんな小さじ用なら来ないで下さること言つたそつた顔をして詫び言葉。澤。

「謙遜するな。俺は十分つまこと思つがな。」

「まあ、あいつが聞いたら、『まだまだ』と言われそうですね。」

「はあ・・・菅原はそれほどピアノにひかつたのか・・・」

続ける石嶺。

「後。偵察隊が何もないと言えば、3・4日後に大陸に上陸する。お前も付いて来い。」

「それを先に言いましょうよ。といふかそれが用なんじゃあ・・・」

部屋を出て艦内通路に出る。しづらしくあると、伝令がやつてくる。

「何やつていたんですか司令ー緊急事態ですかー。」

「何だとー。」

「言わん」ひちや無い。司令頑張れー」

嫌な顔をして棒読みで言つた谷澤。

「谷澤、後で呼び出し。司令室に。さに行くぞ。」

「中尉はもうこませんよ。司令。お氣の毒に。」

いつの間にかに逃げてしまつた谷澤の事を指して笑いながら囁く。

「伝令。お前もだ。後で呼び出しておけ。」

伝令が『えつ』といつがときすでに遅し。
急ぎ足で歩く一人。

「あれは・・・竜？」

飛龍偵察隊では、突然現れた何匹もの赤い生物に驚く。竜のような赤い生物の上には騎士が乗っていた。赤い竜は炎を吐いてくる。

「炎を吐いてきましたー。どうやら、撃墜する奴ですー。」

「回避しろー。正当防衛だ！仕方ないー。」どうやら一番機ー火器の使用を独断で許可するー。」

ブローニングM2機関銃が敵竜に向かつて構えられる。

「メドウーサの発射準備終了ー。撃てー。」

ブローニングM2機関銃が毎分850発の勢いで弾を吐き出す。竜は血を吐いて落ちていく。

騎士に弾が掠めると、騎士の片腕は無くなっていた。あつといつまに2匹の竜を撃墜する。他のへりも攻撃を始める。仲間たちがあつという間に落ちていくのを見て、竜たちは怖い付いたのか撤退を始めた。

「竜たちが撤退していきます。」

「いらっしゃるも撤退するぞ。」

だが水色の竜がこちらを追つてくる。なんだかわしきの赤い竜より早そうな竜だ。

「あの竜はどうですか？」

「おやりく追跡する氣だろ？」

もし母艦の位置を嗅ぎ付けられたら……

「仕方が無い。撃墜しろ。」

ヘリが射撃を再開し、水色の竜は血を吹いて騎士と一緒に地面上に落ちていった。

「これで追手も居なくなつた筈だ。」

そして、偵察隊は母艦へ戻つていくのだった。

「なるほど……そのようなことがあつたとは……」

呟く石領。その横には谷澤と云々が正座させられていた。

「まあいい。偵察の結果人間が存在し、正体不明な生物の存在、文明の件、そして、国が存在すると云つことか……」

「まあ、そういう風に考えたほうがいいですね。」

もう足がしびれたんだと言いたそうな顔をしながらそつそつ谷澤。

「厄介だな……領海の侵犯、さらに領空の侵犯か……」

完全に正座の件は無視して書く。

「上陸の件はどうするんだ？」

尋ねる谷澤。

「変更はしない。だが、もしもの時・・・」

「その場合はその国に攻撃を加えることが出来るように準備しておけ。さてと、上陸準備だ。偵察隊は野営や上陸に適した場所を探してくれ。」

「いつ言ったか領は、いつ一言付け加えるのも忘れなかつた。

「あ、その二人はあと一時間このままな。」

二人はこの世の終わりのような顔をしてお互いを見つめた。後で司令室が出てきた二人が歩けないくらいにフラフラだったのは言つまでも無い。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?（後書き）

ピアノの曲は「戦場のメリークリスマス」です。
メドウーサ＝ブローニングM2重機関銃の別名です。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?

私はおかしな夢を見た。

おかしな格好をした人が貴族に決闘を挑むという夢。
きっと任務のし過ぎなんだろう。

普通なら忘れてしまう夢が、何故か頭の中から離れなかつた。
部屋の中で本を読んでみるが、何故か本の内容が頭に入らない。
せつかくの虚無の曜日なのに。

どんどんとドアをたたく音がする。
うるさい。読書の邪魔になる。

『サイレント（消音）』

これでゆつくり本を読めるかと思った。
でも現実はそう甘くは無い。

ドアが開く音。『解錠』^{アンロック}を使つたらしい。

音は聞こえないけど、彼女の言いたいことは大体分かる。
どうせ、相手を見つけたから着いてこいだとか、そんな感じだろう。
でも、数少ない親友の頼みを無視することは出来ない。と考えていたら、本を取られた。

仕方が無いので、呪文を解く。そうしないと本は返してもうえないとだろう。

「タバサ！行くわよ！」

本を返される。

どうせまた相手を見つけたのだろう。

それでその相手が遠いところに行つてしまつたのだろう。

「・・・また着いて来い？」

聞いてみる。するとキュルケは、

「せうだけど？」

それはどうにかならないのか。私の貴重な時間がガラガラと音を立てて崩れ去っていく。

「・・・何処まで行くの？」

「トリスターニアまで。」

あんな遠いところまで・・・面倒だ・・・

「はあ・・・GPSなんかあつたら助かるのになあ・・・

例の秘密の部屋でぼやく石嶺。ピアノの席に座る。

「測量だつてそう時代遅れな技術じゃあなかつたと思こますけど・・・それに無いものねだりしたって・・・」

椅子を全て占領して寝転がつた状態の谷澤が答える。

「勇樹もにーにもずるーー私にも椅子よーせー。」

椅子に座る「」ことが出来ず壁に寄りかかる黒い髪の美人。彼女は石嶺の妹、若葉。

「「お気の毒ですーー」」

一人の心が一つになる。もちろん棒読み。

「一人共地獄に落ちる・・・」

泣きやうな声で言つ若葉。

「わざと・・・作戦書によると作戦決行は明日か・・・」

何事も無かつたように作戦書を読み上げる石嶺。

「上陸位置は北東85km、上陸兵力は1000人か・・・」

「それに司令と護衛・・・はあ・・・俺も行くのか面倒くさい・・・」

「

ぼやく谷澤。

「一人とも賊に襲われて死んじまえ」

「若葉。もういいまでにしておけ。これ以上はお呼び出しだぞ?」

『お呼び出し』とこひ言葉で黙りこぼれる若葉。

「作戦によると揚陸艇で歩兵を積んだ歩兵輸送トラックを揚陸させて、道を進むと。

その後町があれば情報の収集を行つて、国や町の代表者やこひり辺の地理を聞きだすと。

「いたとなつたら戦闘。謎の生物や火の玉の件もあるからな・・・油断はしないで欲しいな。」

「文明が無かつたら上陸後の道の敷設も自分でやらないといけないからね。楽でいいよね。」

道が無ければよかつたのにとつ顔をする若葉。

「まあ、そうつまくはいかないだらびし、こつたとしでもこの身なりじやあな・・・」

白い士官服を指して呟く谷澤。

「そんな中世の服を短時間で作る化け物じみた能力はこの艦隊にはないよ。お氣の毒に。」

若葉が棒読みで話す。

「帝國海軍の七不思議にどつかの艦隊に棒読みでとんでもないことを棒読みで呟くやつがいるって噂が・・・」

この人たちの相手は出来そうにない。速攻で部屋から出る。向かつた先は、航空機の格納庫。

そこには、へりやっこが所狭しと並んでいる。

谷澤は整備器具を持つと、整備員の仲間たちと航空機の整備を始めた。

數十分経つと、ほぼ全ての航空機の整備が終わり、整備員たちは自分の部屋に戻つていく。

基本的に上官である谷澤は最終確認を終えると、ある戦闘機の所に

歩く。

その飛行機には尾翼に赤いトンボのマーク。撃墜数を表わす赤い星。主翼には日の丸。

普段全く飛んでいないにもかかわらず、そのJ20は他の航空機のよつに綺麗に整備されていた。

「全く……」いつが飛ぶ日は何時来るのだろうな……

彼は自虐的に笑うと、格納庫を後にした。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?（後書き）

次話に上陸して、その話のうちかその次にある原作キャラとの遭遇
をしたい。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？

トリスターー亞の王城。

トリステインの枢機卿マザリーーは、豪華な家具のある部屋で、ある知らせに頭を悩ませていた。

ある領主の館の近くで、西からやつてきたと思われる見たこともないような奇怪な竜がやつてきたといつ。

その竜は羽ばたいていないのに飛び、その上攻撃に来た火竜騎士団を壊滅させ、追跡に来た風竜騎士団まで壊滅した。

生き残りの話では、その奇怪な竜の中にある黒い棒から出される弾で、気付いた時には騎士も竜も粉々になつて落ちていつたといつ。

下手したらその国と戦争になつてしまつ。

そうなると、また国の財政は傾いてしまつ。

それどころか、衰退したこの国の国力では勝つのは困難。

謝りに行くとしても、それが何処にあるのか分からぬ以上、謝りにいけるわけがない。

後、西海岸のほうで、津波があつたといつ。被害は大きいらしい。これで復興のためにさらに財政が苦しくなるかと思うと、頭が痛くなる。

もし貴族の伝統や誇りとやらで飯が食えるのなら、この財政もいくらは樂になるのだが・・・

作戦決行日の朝になつた。

天気は良好、波もそれほど高くはない。

ヘリが周辺を哨戒する中、揚陸艦から上陸用の舟艇が吐き出される。中には兵士を載せたトラック。

舟艇は砂浜に乗り上げると、トラックを吐き出して揚陸艦に戻つていぐ。

上陸作業は一時間もかからなかつた。

そのころには、1000人の海兵隊と司令部、武器やヘリ、補給物資が揃つていた。

「海兵隊に敬礼！」

第三艦隊乗員は、離れ行く海兵隊に向かつて敬礼をする。

海兵隊も、乗員に敬礼をする。

それは、絶対に帰つてくるとこつ誓いのように見えた。

海兵隊は、道をまっすぐに進む。

何十台ものトラックがぞろぞろと蛇のように。

海の向こうに見えていた艦隊は陸から離れてゆく。

これは、艦隊を民間人に見られることを防ぐためである。

数時間後、海兵隊は野営できそつな平地を見つけると、テントやプレハブを組み始めた。

建設作業がある程度落ちついた時に、周辺の町への偵察部隊が出発した。

だいたい小隊規模の偵察部隊の中に、なぜか艦隊の司令である石嶺と谷澤。

町に行くなと念を押されていたはずだが、石嶺が行くといつて聞か

なかつた。

こんな提督が有事の時にはどんなでもなく頼れる艦隊司令になるのだから驚きだ。

そして、兵士はいつもこの人に振り回される司令部にならなくて良かったと心から思ったといつ。

「それにしても、この世界は空気が綺麗ですよね・・・」

ブロロロロロ・・・とこう音と白い煙が吐き出される。道の上を走るトラックの中で谷澤が呟く。

「排気ガスとは無縁だしねえ・・・おまけに地球温暖化なんて言葉誰も知らないから。なんか故郷を思い出すな・・・」

と、栗色の髪をしたポニー・テールの女性、諏訪が話す。

自分の故郷。それを思い出すと、谷澤は胸が痛くなる。

1年前のあの日。実家に休暇をもらい帰省していた時に、あの地震は起きた。

一瞬で日常が崩れ去つた。

そして、家族と一緒に高台に逃げている途中、あのどす黒い波が・・・

あれから的事は、あまり記憶に残っていない。

確かだつたことは、俺は大切なものを何一つ守れない無力な存在だということ。

俺は家族も故郷も帰る場所も失つたといつこと。

と、色々考えていると町が近づいてきたようだ。

向こうに見えるいかにもヨーロッパ風の町。

さすがにヨーロッパ風の服装は無かつたので、そのままの服で行くことになった。

絶対に変な目で見られるでしょう。と谷澤は思つ。

「ではこれより情報収集を開始する。班に分かれて聞き込み調査しろ。また何らかの危機に陥つた時を除き武器の使用は禁止する。」

わて、これからあの司令が織り成す悪魔のよつた物語が待つてゐるのと思うと、胃が痛くなる。

これまで外国などに司令と一緒に行つた任務の回数57回のうち厄介ごとに巻き込まれた任務の回数実に46回。

中でも一番ひどかったのはアフリカで夜司令と一緒に出歩いていた時に夜盗に取り囲まれ誘拐され数日間小屋の中に閉じ込められ命からがら逃げ出した事。

早くキャンプに帰りたい。できることなら飛龍まで帰りたい。お願ひだから。

だがそんな谷澤の願いもむなしく、石嶺に同行を命令される」ととなつたのだった。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?（後書き）

谷澤つて本当に不運ですね。

私生活でも仕事でも。

書いている俺までも不憫に思えてきた。

巻き込まれる確率約80%・・・

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?

“どうしてこうなった。

必然ともいえるこの状況。

なんでこの人と一緒に居るとトラブルが起きるのか。
よりもよつてこんな大切な時に。

事の顛末を簡潔に報告する。

町に行く途中に、何かの荷物を持つた緑髪の女性にあの憎たらしい司令が偶然ぶつかってしまい、その荷物が落ちると。
その中には金貨やら銀貨やらいろいろ。まあびっくり。
その女性が案の定気付いて何故か知らないがこちらを始末しようとでかくてとんでもない化け物を繰り出してきた。

んで、この状況と。

完璧に司令が悪い。偶然でも故意でも司令が悪い。そしていつも俺が苦労していることに気付かない司令。ここまで来ると完全に憎いとか嫌いを通り越してしまつ。

おそらく30 m程度あると思われるその化け物。
その肩の上にあの女性が乗っている。

外見からして銃は効かない。効くわけがない。

対戦車兵器なんて便利なものは残念ながら持ち合わせていない。
でも偵察部隊はいたつて冷静。やっぱり実戦経験者はすごいね。
え？あのバカ司令は？

子供みたいな目でこんなファンタジー展開があつたのかと大興奮。
お前もう少し危機感持て。

この場合どうすればいいだらうか。

あの化け物の手足で潰されたらまず終了のお知らせが来る。
さつきも思ったが銃が効くとは思えない。

そしてこの場合上にいる女性はできるだけ無力化したい。

となつた時、あそこから落ちたらまず助からないといつゝとは容易に予測できる。

話が通じる相手でもなさそうだ。

ポケットの中に何故かスタングレネードが一つ。

叩いても「」になつたりはしません。

とりあえず手に持つ。

叫んでおけばある程度の対策はしてくれそうだ。

だつて耳栓と対闪光ゴーグルは携帯されているはず。

「スタングレネード使つぞー！」

大声で叫ぶ。

それを聞いた隊員たちは耳栓と対闪光ゴーグルを装着していく。もちろん俺も装着。

スタングレネードのピンを思い切り抜く。

そして俺はそれを、女性が立っている上空までぶん投げた。

女性のもとに飛んでいくそれは、目も眩むよつた闪光とどんでもない音を発生させた。

やっぱり装備をつけていても目が眩しいし、耳がうるさい。

女性は倒れて気絶している。まあ無理も無い。あんな凶悪兵器使われたのだから。

偵察は中止。女性は、金とか銀の荷物と一緒にトラックに運んでおいた。

基地に帰つたら色々と聞き出して、それが終わつたら解放する予定だ。

利用できやうなら最大限利用する。俺つてひどい。

これで58回中47回。確率約81%。泣いていい?といつか泣く。帰つたらいろいろと聞き出す仕事もあるし・・・はあ・・・自分が惨めになつてきたよバカヤロー。

キングクリムゾンして基地に戻つてきた。しつかり書かない作者のバカヤロー。

さて、これから始まる面倒くさい仕事をじつやつて終わらせようか。とりあえずテントの中に女性を寝かせておく。

なんかすーすーと寝ている。

寝ている時はあの極悪司令も普通の人間に見えるからあら不思議。諭訪さんに女性の監視を任せた。

こうじつには女性同士のほつがいいのではと思ったからだ。

で俺は何をするか?始末書作り、書類処理、石嶺のバカヤロー。先ほどからバカヤローばかり言つている。

はあ・・・すゞく自分が惨めになつてきたよ・・・

俺はいつも一倍の早さで仕事を終わらせるべ、自分のテントに戻るのだった。

首相官邸では、第三艦隊からのある報告に頭を悩ませていた。

「人間が存在し、文明がある・・・しかも魔法といつ馬鹿げたものが存在するか・・・」

一人の科学者が呟く。

「これで異世界の開拓は不可能か・・・現地住民と交渉するしかな

いのか・・・」

加地が心配そうに言う。だが加地は昔からの経験や人間の性質で知っていた。

特別な力を持つものは、それを持たない者に對して軽蔑する。

そうなつた以上対等での交渉をしようとしたし。

それなら侵略も手の一つであるが、大義名分なしの侵略を国民が許すと思えない。

そして、魔法が未知の力である以上、うかつに手を出せない。

産業面でも問題が発生していた。

半導体などこれまで外国に頼りきりだった部品の供給が追いつかないのだ。

かつてからあつた戦争で帝國は自力である程度の自給能力を持つ必要に迫られた。

だが全ての部品を製造できるというわけでもない。

ついに底を突いてきたのだ。

景気は悪くなつてきており、ここで失業者を増やすわけにもいかない。

帝國は少しずつ破滅の道を進んでいくのだった。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　？（後書き）

なんか微妙。次話投稿時に直すかもしません。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?

「魔法が存在しない?」[冗談は言わないで欲しいよ。」

テントの中では、田を覚ました縁髪の女性と話をしていた。

「魔法は存在しません。ですが我が国では科学が発達しており……」

「

そうこうして諏訪は拳銃を出す。

「これは銃の一種で、連射は出来ませんが小型化に成功しており、うまく狙えれば人を殺すことが出来ます。それに連射可能な機関銃やらいろいろありますね……」

銃に関するつらがくを長々と語りだす諏訪。あまりの量に圧倒される女性と谷澤。

「……ままでにしておけ……疲れる。えっと……召を召乗つていなかつたな。

我々は大日本帝國海軍第三艦隊所属の谷澤といつ。階級は中尉。この銃マニアは諏訪。陸戦隊所属だ。」

「銃マニアじゃありますん!」

と諏訪が怒る。

「はあ……私はマルチダ。ただの貴族崩れのメイジだよ。」

「貴族崩れ・・・メイジとは？」

「魔法を使える奴らの事。それでそういうやつらは大体貴族と呼ばれている。そして貴族は平民を榨取して贅沢の限りを尽くす。あんたらそんなことも知らないのかい？」

「ところで、メイジはどんな魔法が使えるのか？教えてくれないだろ？」「

「はあ・・・たとえば、『ライト』」

「彼女がそういうと、明かりが灯った。驚きを隠せない二人。

「では、先ほど貴方と交戦した時に出てきたあの化け物も魔法か？」

「まあ・・・私が作つたけど？」

「はあ・・・なんちゅう世界だよ・・・ところで国といつもの存
在するのか？我々はそことできるだけ話がしたい。」

「はあ？ つてあんたら何するつもりだい？」

「貴方も知つていると思うが、日本には魔法が存在しない。かわりに科学が発達しているが、石油やら石炭やら鉄などが我々には欠かせない。というか、そういうものが無いと我々は滅びる。というこ
とで、貿易をしてもらえないだろうかと思つてね・・・」

「残念だったね。あの貴族たちが魔法が使えない相手に対等に交渉
するとと思う？」

「思わないな。そしてそういう奴らほど無駄にプライドが高い。」

「よく分かっているじゃないの。ところで、私を何時までここに閉じ込めるの？」

「もう一つの目的は・・・あなたと交渉がしたい。」

「はあ？何を交渉するんだい。」

「マルチダさん。貴方を我々のほうで雇いたい。」

諭訪とマルチダが訳が分からぬといつ顔で谷澤のほうを見る。マルチダが口を開く。

「お断りだね。どんな仕事か知られていない。それにあんた等は得体が知れない。」

「任務としてはこちら辺一帯の情報の提供と収集。給料は情報の質や量にもよるが、悪くはないはずだ。」

「何故私を？意味が分からぬ。」

「あの馬鹿司令どぶつかつた時、貴方は金貨やら銀貨を落とした。そしてそれに気付いた貴方は我々を始末しよつとした。普通ならそれを拾つてそのまま立ち去るはずだ。」

だが貴方はそうしなかった。それが指示する答えは貴方が盜賊やら何か危ない稼業に手を突つ込んでいるといつこと。そういう仕事は国の裏側を知つてゐる可能性が非常に高い。

そして、貴方の攻撃で我々に怪我人が出たこと。

本当はあれで報復射撃の対象となり射殺されてもおかしくはない。
貴方の命は我々が握っているといつても過言ではないのだよ。

あと強いてあげるのなら・・・おそらく信頼できるという勘かな?
凶悪殺人犯やらそちらへんの奴とは違うと思ったからな。
守る物があるといふか、そんな目をしていたからな。」

沈黙。しばらくして、マルチダが笑い出す。

「・・・ハハハハツ・・・面白いね。分かったよ。その仕事受けて
やるよ。それに、あんたが言つていたこと、ほとんど当たつて
しね。」

「昔から人を見る」ことには自信があるんだよ。必要なものがあれば
こちらで手配する。我々は大体ここにいると思うし、来れる時に来
てくれ。恐らく海軍中尉の谷澤いるかと言えば通してもらえるだろ
う。ではよろしく頼む。」

そう言つた谷澤も、笑っていた。

赤いトンボが雪空を飛ぶ　?（後書き）

報復射撃・・・まあこんな感じでいいと思います。

マルチダさんが情報収集役で加入しました。

報酬は金塊だつたりする。

今年の投稿は本当にこれで最後となります。

こんな駄文を読んでいただき本当にありがとうございました。

皆様良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6925z/>

赤いトンボが雪空を飛ぶ

2011年12月31日18時45分発行